
沢一の事件簿 FILE 1 白雪村殺人事件

推理小説好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沢一の事件簿 FILE 1 白雪村殺人事件

【Nコード】

N9436E

【作者名】

推理小説好き

【あらすじ】

沢一は、推理小説オタクで名探偵を夢見てる。たまに、ドラマで犯人を当ててることも……。今回は、ふるさとの北海道白雪村での殺人事件。沢一にこの謎は解けるのか！

プロローグ1 ーのつぶやき・・・(前書き)

この小説はフィクションです。白雪村、沢一などの地名、人名は
現実にあるものとは関係ありません。

プロローグ1 一のつぶやき・・・

これでみんなお別れだね・・・

ああ・・・

オレは東京へ行くからな・・・

また・・・絶対に会えるよね！

いつかな・・・

オレが聞いた泉の最後の言葉だった・・・

死って何だろう・・・

もう二度と会えない・・・

どんなに願っても戻らない・・・

死は絶対の一方通行の入り口なのかな・・・

プロローグ2 それ急げ！

なんて・・・普段考えたりもする
忘れようとしても忘れられないこと。

記憶から消そうとしても、どこかで残っている。

「本当に死って何だろう・・・。」

「一兄ちゃん、何してるの？」

「あつ、それは・・・、って、うわあ！いつからここにいた！」

「さつ、さつきから・・・。変な妄想に入ると・・・。」

といいかけた途端、一がこう言った。

「変な妄想って何だよ！」

はあ・・・、びっくりした・・・。今は、オレの弟の智也だ。
時々、核心を突く言葉にびっくりするのだが・・・。

もう一度会えるけれど・・・、もうあいつとは会えない・・・。
しゃべっても、返事はもう二度と来ない・・・。

もう少し、白雪村のことを説明しておこう・・・。

白雪村は、北海道にある小さな村だ・・・。山に囲まれているが、
隣町は、黒岩町。こちらは港町だ。黒岩と白雪の間には、トンネル
がある。オレは、まず、新千歳空港まで行き、そこから、バスで黒
岩町へ行く。さらに、バスで白雪バスターミナルへ行くのだ。面倒
だが仕方ない。なぜなら、白雪村の交通機関は、バスとタクシーの
み。そして、バスは、1日に2便。かなり不便なのだ。

唯一の中学校がオレが通っていた、白雪中学校。小学校は2校ある
が、高校はこの村にはない。

つまり、中学卒業の後、離れ離れになるのだ。その中学校も去年、取り壊しが決まり、来年の夏に取り壊しをする。

その前に、俺たちは、記念写真を撮ったり、思い出の品を探したりすることを目的に行くのだ。

しっかし、交通費が高いぜ……。ウチの家計は厳しいから、お小遣いなしになったりして……。トホホ……。

まあ、同級生に久しぶりに会えるわけだから、まあ、いいか。

つて、あっ！オレ、パーティー代を払うことが決まっているんだ……。

交通費だけでも、かなりするのに……。

「おい、はやく、行かないと飛行機に間に合わないよ！」

えっ、今は……。やばい！搭乗手続きギリギリの時間に到着だ！間に合うかな……。それ、急げ！

「お兄ちゃん、財布！」

「あっ、ありがとう！うわあああ！猛ダッシュだ！」

つたくま、朝から大変だぜ。こんなに走るなんて……。

うう……。体力のないオレにとって、これは、苦痛だ……。

第一章 第六感が騒ぐ

「はあーあ、移動だけでも、一苦勞なんだよな……。白雪村までは……。」

『次は、白雪駅、白雪駅です。』

やっと、着いた……。
白雪村……。雪が美しい村だ……。

「おー、沢じゃねえか！」

「瀬木、久しぶりだな！」

瀬木太一。

オレの一番の友達。成績はオレと違ってトップクラス。生徒会長も務めた優等生なのだ。責任感があつて頼れる友達だ。

「沢君ですね……。名探偵の親戚の。」

「ああ……、遠い親戚だが……って誰？」

「あ、失礼しました。北海道警捜査一課の警部、氷室成彦といいます。」

エリートのようだ。この若さで警部とは……。驚くくらいだ。

沢は何かいやな予感がした。

探偵としての第六感というか、なんとなくというかそんな感じがした……。

それは、本当の出来事となるのは、沢にも分からなかっただろう。

どうせ、気のせいだと思ったかもしれない……。

「沢君じゃないか！で、推理は絶対調かい？」

「ははは、推理ってねえ……。」

「いやー、たまにドラマで犯人当ててるって？すごいよー！」

こいつは、阿津目総太郎。

推理小説オタクでオレのよき理解者。

まあ、コナンでいや、服部って感じかな？

「久しぶりに中学校へ行くか？」

「でも、授業中じゃ……。」

「廃校になっただよ……。」

白雪中学校は、オレが通っていたころは、全校生徒が19人だった。ついに、廃校になるとは……。

オレはその中学校へ向かった。

そこにあるものがあるとは知らずに……。

第二章 第一殺人

「まずは、体育館から……っ、おい！あれはなんだ！」
瀬木は、体育館の窓から見える人のようなものを見つけ、沢へこう
いった。

「あれは……首吊り死体だ！」

オレは直感的に言ったが、瀬木は、その答えを聞かずに中に入っ
ていた。

「お……、おい！あれは……、波崎じゃねえか！」

「警察へ連絡だ！」

そして、警察がかけた。
運悪く、3人しか来なかったが。その理由はよく分からないが、
他の刑事は、指名手配犯を追っているらしい。

「被害者の名前は、波崎康太。17歳。第一発見者は沢一と瀬木太
一だな。」

いかにも性格が悪そうな刑事が上司らしい。

「あっ！よわよわ刑事！」

瀬木が一人の刑事に向かって言う。沢は何がなんだか分からないが、
……。

「よわよわって……、岩師圭介ですよ！」

その由来は、岩師が鰯と同じ読み方で、鰯には弱が入っている。あとは、推理力も体力もあまりない。こんなんで刑事かというくらいだ。だから、よわよわ刑事とも呼ばれている。

「あつ、自分は飛騨永作です。捜査にご協力ください。」

この自己紹介はどう見てもわざとらしくった。

「飛騨警視！鑑識からの報告です！まず、死亡推定時刻は、午後3時から午後3時45分の間です。それで、一つ妙な点がありました。」

さつき会った氷室刑事のようだ。

「妙な点とは？」

「死因です。死因は毒死でした。おそらく、シアン化カリウムと思われる。アーモンド臭がありますので。」

「妙だな……。毒で死なせてから首吊りか……。」

シアン化カリウム……。通称青酸カリか……。入手方法がよく分からないが……。

病院へ行けば手に入るな……。

「今分かりましたが、殺害ができたというか、動機があるのは、この中のみなさんだけですね。」

と、岩師は言う。それを聞いて瀬木は反論した。

「おいおい、確かに俺たちには動機はあるぜ。ただ、沢だけは例外なんだよ！」

「と、言いますと?」

「沢は波崎のこと、オレからの電話でしか知らないんだ。何しろ、あいつが転校してきた2ヶ月前に沢が転校したんだからな!」

岩師はすぐ確認をとる。そして、先生や他のみんなの証言で確認できたようだ。

「じゃあ、沢さんは容疑者から外れますな。」

「ちよーっと、待った!」

飛驒が叫んだ。

「確かに直接的な動機は沢にはまったくない!ただ、間接的な動機があるかもしれないんだよ!」

「そーいや、波崎って、瀬木を嫌っていたよな……。瀬木の大親友だった沢が犯人ということもありえる……。」

阿津目が、自分の推理力を出して推理を話した。

飛驒は、

「やはり、容疑者のようですね!」
と強く言った。

捜査はまだまだ続きそうだ……。

第二章 第一殺人(後書き)

更新遅れています。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436e/>

沢一の事件簿 FILE 1 白雪村殺人事件

2010年10月8日23時17分発行